

## 提 題

## エックハルト問題

中山 善 樹

エックハルトは今日においても謎の思想家である。その生涯も謎に包まれているが、その思想も、多くの研究書が書かれていながら、一向に評価が定まらない。そればかりか研究が進展すればするほど、ますます解釈の幅も広がってきているようである。次に現在までに判明した事柄とそれに対する私見を述べる。

## 1 ラテン語著作とドイツ語著作

周知のように、エックハルトの著作には、ラテン語著作とドイツ語著作があるが、従来は、主としてドイツ語著作が注目されてきた。しかし現在では、多くの主導的研究者 (E. Winkler, H. Fischer, K. Flasch etc.) の一致した見解は、エックハルトの思想研究の基礎となるのは、ラテン語著作であるということである<sup>1)</sup>。それは第一に、その思想内容の豊富さと表現の厳密さのためであり、第二には、テキストの信憑性のためである。それに対して、ドイツ語著作は、一般民衆と修道女に対する教化のための説教と講話からなり、その表現に厳密さが欠けており、テキストの信憑性もラテン語著作に比べると、遥かに劣る。そればかりか、ドイツ語著作が編纂されるにあたって、その批判的基準にされたのはラテン語著作であった。確かにドイツ語著作の写本の数は、ラテン語著作に比べて遥かに多い。しかしこのことから、ドイツ語著作のラテン語著作に対する内容的優位を即断することはできない。

何よりもまずエックハルトはドミニコ会の内部において、トマスの後継と目されていた当時最大級の神学者であった。ラテン語著作は、聖書の諸書を講解し (lectio)、そこで生じた問題を討論し (quaestio)、説教する (praedicatio) という神学教授としてのエックハルトの公的教職活動の所産であり、純粹に学問的性格のものである。したがって、その学問的意義に注目するならば、ラテン語著作のドイツ語著作に対する内容的優位は否定しがたい。しかしこのことは、ドイツ語著作は研究に値しないということではない。エックハルトが偉大な神学者であったのと同時に卓越した説教家であったことは否定できない。しかしながら、強調しておかなくてはならないことは、

ドイツ語著作はラテン語著作を基礎にして初めて解釈可能となるということである。今日のエックハルト研究においては、もはやラテン語著作の軽視、ドイツ語著作への偏愛といったことは許されない。エックハルト批判的校訂版全集の主導的編纂者の一人であった J. Koch も言うように、ラテン語著作とドイツ語著作の間に内容的齟齬はなく、両者は密接に関連している<sup>2)</sup>。

また、エックハルトの思想史的立場づけについても、従来はエックハルト思想を或る研究者 (W. Bange) は、トマス思想の枠内で解釈しようとし、他の研究者 (H. Ebeling, H. Hof) は、トマスとは異なる新プラトン主義的性格のものであるとした。また別の研究者 (J. Koch) は、それらの折衷を試み、エックハルト思想の根本はアウグスティヌス的新プラトンの性格のものであるが、その表現形態はアリストテレス的トマスのなものであるとしてきたが、現在では、エックハルトはトマス思想に精通しており、それを前提として受け入れた上で、それを独自の仕方、恐らくアルベルトゥス・マグヌスとディートリッヒ・フォン・フライベルク (Dietrich von Freiberg) の知性主義の影響を受けて、超克しようとしたものであるとされている (K. Flasch)<sup>3)</sup>。主導的研究者の一人である H. Fischer によると、トマスが留まったところで、エックハルトは自分の思想を始めるのであり、ここではトマスは前提にされており、方法的にさらなる展開へと導かれているのである<sup>4)</sup>。

## 2 聖書解釈の方法

それでは、そのようなエックハルト思想の独自性はどのような点に現れているのであろうか。私はそれは、エックハルトの聖書注解の方法に現れていると思う。エックハルトのラテン語著作は *lectio, sermo, expositio, tractatus, collatio, quaestio* と多岐にわたっているが、それらはいずれも広い意味での聖書解釈であり、しかも聖書の通常の連続的逐語的解釈ではなく、冗長さを避けるために、多くの事柄は短縮し、ないしは完全に省略するように配慮した上で、比較的小数の聖句を選び、それに深遠な霊的解釈を施したものであった。例えば、主著と見なされる『ヨハネ福音書注解』において、全部で 21 章からなる「ヨハネ福音書」に対する注解の三分の一以上がその第一章のみに充てられており、さらにこのまた三分の二以上が、その冒頭の「始原において言葉があった」(In principio erat verbum) という聖句に充てられている。というのは、エックハルトはこの聖句のうちに含まれている「始原」(principium) 概念

のうちに、重大な哲学的意味を認めていたからである。また、この「短縮」(brevitas)の方法のうちには、聖書は全体として一つの有機体であり、全体は部分のうちであり、一つの聖句のうちにも聖書の全体が反映しているとの確信があった。さらにその際、通常の聖書解釈においては最も重要視される聖句の文字の意味(sensus litteralis)は殆ど顧慮されることはなく、専らその霊的ないし譬喩の意味(sensus spiritualis sive parabolicus)が注目され、そのうちに隠されている哲学的意味を開示することに向けて解釈は遂行された。

しかもその際、この「短縮」を旨とする聖句の選択基準は注目すべきものであった。エックハルトは次のように言っている。彼の聖書解釈の方法は、「旧、新約両聖書の聖典の多くの聖句についての珍しい解釈である。特にそれらのうちで他のところでは読んだことも、聞いたこともないと思われるようなものが扱われるのである。確かに通常のものよりはより良く、より重要なものであるが、新しくて珍しいものはより甘美な仕方で靈魂を刺激するからである」<sup>5)</sup>という言葉のうちに端的に示されている。「次のことに注目すべきである」(notandum quod)という一定の形式で、新しい解釈を導入するエックハルトの聖書解釈は、彼の神学教授としての講解や説教の有り様を彷彿とさせるものである。また、具体的な解釈の遂行にあたっては、聖書の旧約と旧約の区別は殆ど顧慮されることはなく、聖書は全体として一つの完結体と見なされた。例えば、エックハルトは、『創世記注解』においても、先に述べた「ヨハネ福音書」に対するのと同様に、やはりその「始原」概念に注目しており、その冒頭の「始原において、神は天と地とを造られた」(In principio creavit deus caelum et terram)という聖句に最大の関心を払っている。またそれら、新約と旧約の二つの聖句の解釈は、結果的にも極めて類似しており、「始原」はそのどちらの場合にも、まず第一に、「イデア的理念」(ratio idealis)として、第二に、「知性」(intellectus)として、第三に、そして究極的には、「存在」(esse)として解釈された<sup>6)</sup>。

### 3 哲学者たちの自然的論証による聖書解釈

以上からすでに明らかなように、エックハルトの聖書解釈はラディカルな哲学的解釈であった。エックハルトはこのような特有の聖書解釈をあくまでも意図的に遂行した。エックハルトは『ヨハネ福音書注解』の冒頭で、「始原において言葉があった」という聖句を説明して、明確に次のように言っている。「この言葉とそれに続く他の

言葉の解釈においては、著者のすべての著作におけるのと同様に、聖なるキリスト教信仰と両聖書の主張する諸々の事柄を、哲学者たちの自然的論証によって（*per rationes naturales philosophorum*）解釈することが著者の意図である<sup>7)</sup>。注目すべきことは、これが彼の「すべての著作における」聖書解釈の意図であると明言していることである。さらに、エックハルトは同書の別の箇所において次のようにも言っている。「それゆえに、聖書は次のように解釈されるならば、極めて適切である。すなわち、聖書のうちには、哲学者たちが諸事物の本性とそれらの属性について書いている事柄が共鳴しているのであり、特に真理の一なる泉と一なる根から、聖書においても、自然においても、存在することによってであれ、認識することによってであれ、真であるすべてのものが発出するからである<sup>8)</sup>。その根拠は、エックハルトによれば、神学と哲学の真理は異なるものではなく、それらは同一の脈管に由来するものであるからである<sup>9)</sup>。すなわち、信仰と理性の真理は分離されるべきではなく、真理は一つであるというのがエックハルトの確信であった。さらに、このような特有の聖書解釈の正当性は聖書自身の証するところでもある。すなわち、曰く「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」（ロマ、1,20）。

このようにして、エックハルトはなしうるかぎり自然的理性（*ratio naturalis*）によって聖書を解釈しようとするが、それはキリスト教の玄義（*mysterium*）である受肉（*incarnatio*）と三位一体（*trinitas*）にまで及ぶ。あるいはむしろ、エックハルトが最終的に、その哲学的解釈の対象とするのは、この二つの玄義であると言ったほうが適切かも知れない。人間の自然的理性はそれ自身の内的動機にしたがって、玄義の内奥にまで突き進んで行くのである。このような企図は、K. Ruh も言うように<sup>10)</sup>、驚くべきものであり、トマスも拒否することであろう。トマスにとっては玄義は、超自然的な事柄であり、自然的理性の及ぶところではない。しかしエックハルトの立場に立ってみれば、玄義が玄義に留まるかぎり、それへの信仰は盲信（*sacrificium intellectus*）に留まらざるをえない。玄義への信仰は知解されなければならない（*intellectus fidei*）。しかし注意しなくてはならないことは、エックハルトのこのような試みは、決して玄義の哲学的基礎づけを目論むものではなく、あくまで玄義への信仰の知解の一形態であり、そこでは信仰が知解に先行しているのである。その意味では、エックハルトの知解の試みはアンセルムスのそれと軌を一にしていると言える。その

結果、エックハルトが到達したのが、「靈魂のうちにおける神の（子の）誕生」(par-tus dei in anima) という根本事態である。われわれの靈魂のうちで神の子が誕生すること、そして恩寵によってわれわれ自身が神の子となること、それが受肉と三位一体の哲学的意味であるとともに、J. Kopper も言うように、エックハルトのすべての著作の言わんとする唯一の主題であった<sup>11)</sup>。またこれは、聖書自身がその正当性を証するところの事柄でもある。すなわち、曰く「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである」(ヨハ、1,12.13)。さらに、「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」(ガラ、4, 19)。

#### 4 神秘主義か

以上のようにして、14世紀初頭のヨーロッパにおいて、アリストテレスの受容やラテン・アヴェロエス主義の影響によって、神学と哲学が急速に分離していく中で、エックハルトは、ユダヤの哲学者マイモニデスに範を求め、聖書の哲学的解釈を遂行し、そのことによって、信仰と理性、神学と哲学の総合を、しかも哲学の側から試みたのである。

しかしここで問われなくてはならないことは、もしそうだとすると、果たしてこのような試みは「神秘主義」(Mystik) という名称で括ることができるであろうかということである。「神秘主義」という名称には、どうしても曖昧で非合理的なニュアンスが付きまとう。エックハルトの試みた聖書の哲学的解釈は、曖昧模糊とした非合理的なものとは無縁であり、その意味では、主導的研究者である H. Fischer, K. Flasch, L. Hödlらが異口同音に言うように<sup>12)</sup>、エックハルトは「神秘主義」ではありえない。確かに、ドイツ語著作は概念が曖昧であり、その上、時として思惟の高揚が見られるので、「神秘主義的」に映るかも知れない。しかしこの場合も、ラテン語著作に対する適切な理解を基礎にすれば、恣意的な解釈を防ぐことができる。エックハルトはドイツ語著作においてもまた、彼の教説が単に聖書の中だけでなく、「理性的靈魂の自然的光においても」確実なものであることを強調した<sup>13)</sup>。確かにエックハルトの思想の根底には、神の恩寵に対する深い神秘的体験があったことは否定できない。しかし

このことから、彼の思想の全体性格が「神秘主義」であったということは帰結しない。トマスを始めとして、すべての大きな思想の根底には、このような神秘的体験が伏在していると思われる。いずれにしても、エックハルトは、トマスと同様に、その著作において「神秘主義」については一言も語っていない。

また、このようなエックハルトの試みは、聖書のケリュグマをその神話論的覆いから取り出し、普遍的な思惟の対象にするものであって、聖書の持つ普遍的真理性をその本来の形態において露にすることを目ざすものである。その意味で、神不在の時代と言われる現代においても、あるいは現代においてこそ、エックハルトの呼び掛けは、重大な意味を持っていると言えるのではなかろうか。

### 注

- 1) 例えば、H. Fischer の見解は以下を参照。Heribert Fischer: Die theologische Arbeitsweise Meister Eckharts in den lateinischen Werken, in: *Miscellanea Mediaevalia*, Bd. 7 (1970) 51.
- 2) Josef Koch: Meister Eckhart. Versuch eines Gesamtbildes, in: Josef Koch, *Kleine Schriften*, Bd. 1, Rom 1973, 211.
- 3) Kurt Flsch: *Einführung in die Philosophie des Mittelalters*, Darmstadt 1987, 167.
- 4) H. Fischer: *op. cit.*, 63.
- 5) Magistri Echardi Prologus generalis in opus tripartitum n. 2: quantum ad auctoritatum plurimarum sacri canonis utriusque testamenti raras expositiones, in his potissime quae se legisse alias non recolunt vel audisse, praesertim quia dulcius irritant animum nova et rara quem usitata, quamvis meliora fuerint et maiora.
- 6) 拙著『エックハルト研究序説』(創文社, 1993) 65-89 参照。
- 7) Magister Echardi Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem n. 2: In cuius verbi expositione et aliorum quae sequuntur, intentio est auctoris, sicut et in omnibus suis editionibus, ea quae sacra asserit fides christiana et utriusque testamenti scriptura, exponere per rationes naturales philosophorum.
- 8) Ibid. n. 185: Secundum hoc ergo convenienter valde scriptura sacra sic exponitur, ut in ipsa sint consona, quae philosophi de rerum naturis et ipsarum proprietatibus scripserunt, praesertim cum ex uno fonte et una radice procedat veritatis omne quod verum est, sive essendo sive cognoscendo, in scriptura et in natura.
- 9) cf. ibi d. n. 444.
- 10) Kurt Ruh: *Meister Eckhart. Theologe, Prediger, Mystiker*, München 1985, 76.

- 11) Joachim Kopper : Die Analysis der Sohnesgeburt bei Meister Eckhart, in : Kant-Studien 57 (1966) 100.
- 12) 例えば, L. Hödl の見解は以下を参照, Ludwig Hödl : Metaphysik und Mystik im Denken des Meister Eckhart, in: Zeitschrift für katholische Theologie 82 (1960) 270.
- 13) Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke. herausgegeben im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart 1936ff., Die deutschen Werke, Bd. V, 11.

### シンポジウムを終わって

今回のシンポジウムにおいて、私の提題に対してなされた質問のうち、紙幅の関係上、二つを選んで簡潔に答えることにしたい。

まず *incarnatio* の歴史性について、エックハルトはどのように考えているかということであるが、この質問に対しては以下のように考える。エックハルトは言うまでもなくイエス・キリストのできごとが *factum* であることを認めている。しかしわれわれの靈魂のうちでそれが内的経験とならないならば、換言すると、「靈魂のうちにおける神の子の誕生」という根本事態が生起しないかぎり、それは僅かなことに留まると言う。このようにエックハルトは *incarnatio* の根源的歴史性を靈魂の内的経験のうちに求めている。

次に創世記の冒頭の *in principio creavit deus caelum et terram* という聖句における *creatio* をエックハルトはどうか考えているかという質問に対してであるが、エックハルトの *creatio* に対する考え方の基本は、いわゆる *creatio continua*、すなわち連続的創造である。エックハルトは創造は歴史の始まりにおいて起こった一回かぎりの出来事ではなく、不断に行われている出来事であると把握している。しかもそれは単に被造物を存在のうちに保持するというのではなく、被造物に対して不断に新しい存在を賦与する出来事として捉えられている。そして言うまでもなく、それが靈魂のうちなる出来事として生起する場合には、「神の子の誕生」になる。